不登校の状態像の変遷について
― 方向喪失型の不登校という新しい型 ―

香　川　　克

Ⅰ．はじめに

学校での心理臨床の中で、不登校への対応は大きな位置を占めている。不登校あるいは登校拒否が我が国で初めて報告されたのは1950年代末であり（保坂（2000）など）、その後、60年代から70年代にかけて、徐々に学校教育の中での大きな問題になってきた。それ以来、50年近くが経過する中で、不登校の子どもたちの示す様態も大きく様変わりしてきている。本論では、これまでの不登校の状態像の歴史的な変化を踏まえ、現在の新しい不登校の姿を描き出すことを目的とする。

また、1995年から、公立の小中学校へのスクールカウンセラーの導入が進められてきた。文部科学省によるこの一連の事業は、学校の教育現場に外部専門家を導入するという意味で画期的なものであり、学校側にとって大きなインパクトを持ったと言われている。その一方で、スクールカウンセラーとして学校に入る心理臨床家にとっても、これまで外来の相談機関（そこには医療機関や福祉関連の相談機関も含まれる）では出会わなかったような様々な子どもたちや家族に出会うことになったという意味で、大きなインパクトを持っていたと思われる。本論の二番目の目的は、学校現場に心理臨床家が入っていくことによって新しく出会うことになった子どもたちの姿を描き出すことである。

さらに言えば、スクールカウンセラー制度が導入された1995年からの16年というのは、我が国の経済成長が終焉し、社会の様々なシステムが限界に直面しつつあることが明らかになってきた時代である。その中で、個人と社会の関係の在り方も変化してきており、個人と社会の軋みの中における個人の苦悩の様態も変容してきている。そして、子どもたちが成長する過程にも、その影響が少なからず及んできている。今、子どもの育ちを保障していくためには、学校や社会の中で大人たちがどのように手を組んでいくことが求められるのか。本論の三番目の目的は、この点について考えていくことの必要性を論じることにある。

Ⅱ．1990年代までの不登校の歴史的変遷

まず、初めて不登校が学校現場で見られるようになってきた1970年代から不登校への対応の形が固まってくる1990年代にかけて、不登校に対する理解と対応がどのように変遷してきたかについて、大まかに記述することから始めたい。

1.「神経症的不登校」という理解が中心であった時期（1970年代～1980年代前半）

前述のように、身体的な病気や経済的な理由

がないにも関わらず登校が困難であるという、不登校と呼ばれる状態が初めて報告されたのは1950 年代末である。それが､ある程度一般化し、多くの学校で見られるようになったのは、1970 年代の後半であろう。

とはいえ、1977 年の中学校における不登校発生率は、およそ 0.2％である。現在の発生率が 3％弱であることに比べると、15 分の 1 である。500 人に 1 人というこの比率は､「中規模の中学校で全校に一人いるかどうか」という比率であった。

そして、この時期には多くの場合、不登校は何らかの精神的な疾患や心身症ととらえられる傾向が強かった。

ここで、1980 年の TV ドラマ「3 年 B 組金八先生（第 2 シリーズ）」に描かれた不登校を例として取り上げてみたい。このドラマは、脚本家の小山内美江子が教育現場などへの取材を重ねて書いているので、当時の学校教育をめぐる雰囲気をかなり反映したものとして見ることができる。不登校についても、当時の社会がどのようにこの問題をとらえていたのかということを、かなりの程度反映していたと考えてよかろう。

連続ドラマの最初の 2 回分が「心を病む子供達」というサブタイトルで、今でいえば不登校の子どもたちを取り上げている。

――武田鉄也が演じる中学校教師・坂本金八先生のもとに、ある日、昔の教え子からの電話が入る。「今、入院しているのだが、金八先生に会いたい」とのことである。金八先生は、週末を使ってその教え子が入院している病院へと赴くのだが・・入院しているのは心療内科の思春期病棟だった。自律神経失調症などの耳慣れぬ「病名」を医師から聞かされながら、金八先生は教え子に会う。そして、グループ療法や病棟行事としての山登りなどに一緒に参加する。その中で、金八先生は心の中でこうつぶやく。「俺のかわいい 3 年 B 組から、このような可哀そうな生徒を一人も出してはならない……」

ドラマの中で、不登校とか登校拒否という言葉は一度も出てこず､「思春期心身症」という言葉が繰り返されているが、その描かれ方から見ると、登場する子どもたちは当時の登校拒否の子どもたちだったと言える。それが､「心を病む」者たちとして描かれ、しかも、圧倒的に「少数派」であることもうかがわれる。金八先生の「このような生徒を出してはならない」という最後の「つぶやき」などは､「不登校はどの子どもにも起こりうる」と文部科学省が指針として述べている現在から見ると､「不登校に対して強く特別視した、不適切な発言」ということになりかねないが、おそらく、当時の熱心な教師の言葉としては自然なものだったのであろう。

また、ドラマの中で、頻繁に「受験勉強のストレス」や「教育ママの存在」が、心の病の背景として言及されている。1980 年当時の不登校をめぐるとらえ方は､「少数の、神経症的に心を病んだ子どもたちが登校拒否に陥るのであり、その背景は、受験ストレスを生み出すような教育体制や家庭の状況にある」というようなものであったようだ。小泉（1973）は当時の登校拒否の分類を試みており、この分類はその後も不登校への見方に強い影響を及ぼし続けているが、その分類の中核は「神経症的不登校」であり、そこに「優等生の息切れ」への言及もある。「受験戦争に疲れて心を病み、登校が困難になる」という、1970 年代の不登校の状態像と社会的な理解の型がうかがわれる。

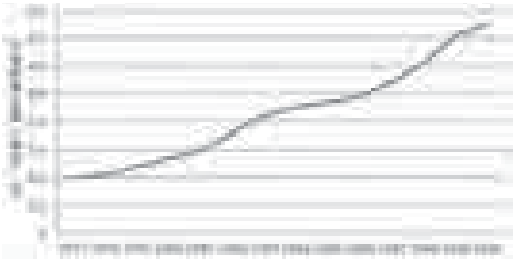
2.「さなぎモデル」による理解と「居場所づくり」による対応（1980 年代後半～ 1990 年代半ば）

1977 年～ 1990 年までの、中学校における不登校発生率の推移を、図 1 に示す。1980 年代を通じて、不登校は増加し続けており、中学生では、1977 年に 0.2％だった発生率が 1990 年には 0.7％に増加している。140 人に 1 人くらいの割合だから、中規模の中学校の 1 学年に一人くらいの割合ということになろうか。中学校の教員にとって、自分の学年に一人くらいは不登校の生徒がいるわけだから、不登校はもはや「めったに見かけない心の病」ではなくなってきた。

そして、この頃には相談機関を訪れる不登校の子どもたちの様子にも変化が見られ始めていたようだ。悩んでいることや苦しんでいることが周囲にもはっきりと伝わるような状態像ではなく、一見するとなんともないような「学校に行かないこと以外は普段と変わりない」という様子の子どもたちが増えてきたのである。

葛藤が前景に出ていて、苦しみや悩みが明確であれば、治療的あるいは現状修正的な関与の手がかりが得られる。しかし、この（当時の）ニュータイプの不登校は、「すっと引っ込んで、そのままそこにいる」といった様子であったので、変化を目指した関与のきっかけをつかむことが難しかった。相談機関への来談意欲も高くはないし、面接の中断も起きやすい。「苦しみや葛藤を乗り越えていくことの援助」という、相談機関が得意とするパラダイムが通用しにくかった。

図 1：中学生の不登校発生率の変化
（1977 年～ 1990 年）



文部科学省「学校基本調査」に基づく。
文部科学省の定義で 50 日以上欠席したものを不登校としている。

その中で、この「すっと引っ込んでいった」時期を、やがて成熟して前進していくための準備期間ととらえる見方が、不登校に関わる相談機関や学校現場の中で生まれ、徐々に広がり始めた。いわば「さなぎの時期」とこの期間をとらえて、そこに生産的な意味を見出そうという理解の仕方である。この「さなぎモデル」については、山中（1978）が「思春期内閉症候群」として提唱したものが先駆的である。

山中の挙げた症例は、さなぎモデル的な不登校が現れはじめたかなり初期の時期の症例といえるであろう。彼らは、筆者が 90 年代初めに教育相談機関で出会ったクライエントたちに比べると、自らの内界にある葛藤を言語で表現することが非常に多いように感じられる。筆者が出会った 90 年頃の不登校の子どもたちはもっと寡黙であり、内界を言葉で表現することが少なかった。とはいうものの、山中が「発見」したのは、それまでの神経症的な葛藤に苦しんでいる様子が顕著に見られる子どもたちとは異なり、「登校しないことと、外にあまり出ない他は普通の状態だから自分が病気だとは思わない（山中（1978）の症例より）」という、葛藤があまり前景に出てこない子どもたちであった。

この「成熟のための準備期間」という理解と「成熟を待つ」という関わりの方針は、当時の学校教育相談で主流となっていた来談者中心療法をベースにしたカウンセリング的な関与とも相性がよかったこともあり、相談機関や学校内の教育相談などの中における不登校への関わ

りの基本的な構えとなっていった。そして、成熟を待つための「居場所」として、護られた空間を用意することが大切にされるようになっていった。「さなぎモデルによる理解－居場所作りでの対応」というパラダイムが成立したのである。

文部省（当時）もこの方向での不登校理解・対応を推し進めた。「登校拒否問題への対応について」という全国の教育委員会にあてた文部科学省の1993年の通達では、学校不適応対策調査研究協力者会議の報告を踏まえて、「登校拒否はどの児童生徒にも起こりうるものであるとの視点に立ってこの問題をとらえていく必要があること」としている。これは、「少数の子どもが神経症的な心の病の結果として登校が困難になる」という、80年代前半までのパラダイムからの転換という意味で、一つの節目となった。そして、この同じ通達の中で、「学校は、児童生徒にとって自己の存在感を実感でき精神的に安心していることのできる場所－『心の居場所』－としての役割を果たすことが求められること」が謳われている。さらには、「登校拒否児童生徒が学校外の施設において相談・指導を受けるとき、（中略）校長は指導要録上出席扱いとすることができる」という、踏み込んだことを通達している。この通達が、フリースクールに関してのある種の公認化（出席になる！）を生み、全国の教育委員会が適応指導教室を設置していく流れを生み、学校の中での保健室や相談室への別室登校がポピュラーなものになる流れを生んだ。こうした「対応策」は、現在にいたるまで不登校対策の中心的な方策となっているが、これらは全て、1990年前後の「さなぎモデル－居場所作り」というパラダイムから生まれている。

そして、1980年代は、前述のように、不登校は「学校に一人」から「学年に一人」に変化した時期でもある。多くの中学校教員にとって（そして、もしかすると多くの大人たちにとって）、自分の身近なところに「不登校」が存在するようになった最初の時期ということになろう。その時期の理解と対応のパラダイムである「さなぎモデルによる理解－居場所作りによる対応」という一つのパターンは、現在にいたるまで、不登校という言葉が呼び起こすイメージのプロトタイプとなっている。

Ⅲ．さなぎモデルでは理解できない不登校－方向喪失型の不登校

前章では、「さなぎモデルでの理解－居場所作りでの対応」というパラダイムが不登校理解の中核になっていったことを述べた。ところが、近年、さなぎモデルが通用しないような新しい形の不登校が見られるようになっている。たとえていうなら、「さなぎの殻を作るための材料が、本人の中にも本人を取り巻く環境にも不足していて、殻が作れない」とでも言えようか。さなぎの殻に破れ目があって、そこから何かが漏れ出てくるような印象を与えることもある。

「さなぎの時期をすごすための居場所作り」として導入された試みとして、相談室や保健室への別室登校や、学校外の居場所としてのフリースクールや適応指導教室がある。しかし、彼らはこうした場所を居場所と感じてそこで安心感を得ることが難しい。その背後には、基本的信頼感の水準で不安定さを抱えているような様子がうかがえる。

本章では、この新しい不登校の形について述べていく。まず、男子の場合と女子の場合に分けて、その状況を記述してみたい。

1．男子の場合

2006年頃、スクールカウンセラーとして中

学校に勤務する中で、筆者は、「遅刻する男子生徒たち」がずいぶん多いことに気がついた。

遅刻というと、「朝の校門に駆け込むが間に合わない」という姿をまず思い浮かべるだろう。始業時にこっそりと教室に入ろうとするけれど、ばれて遅刻になってしまう、というのが、かつての遅刻の姿だった。ところが、この頃に筆者が気づいた「遅刻する生徒たち」は、昼ごろに現れたり、午後になって現れたり、かなり大幅な遅刻をする。そして、どうやら家は朝の段階で出ているらしい。学校にたどり着くまでに、かなりの時間が流れてしまっている。家は出ていて、途中のどこかで時間が過ぎているわけだ。

彼らは一人で行動する場合もあれば、何人かが一緒になっている場合もある。数名で、学校にたどり着かずに公園などでたむろしていればどうなるか。近隣から「そちらの学校の生徒さんが、裏の公園で集まっていますよ」との通報が学校に入ることになる。また、その際に、喫煙でもしていれば、これはもう立派な「非行」である。雨でも降れば公園では過ごせない。そんな時に、格好の居場所を提供してくれるのがショッピングセンターである。しかし、ショッピングセンターの、しかもゲームコーナーあたりでたむろしていると、今度はショッピングセンターから「おたくの生徒さんが・・」と通報が学校に来る。

学校に昼過ぎにたどり着いても、彼らは教室にはなかなか入らない。教室に入るようにうながす先生たちと、押し問答を繰り返すことになり、あるいは、廊下でたむろする。先生たちが話しかけると、逃げ出して、少し離れたところで追いかけてくるのを待っているような素振りである（この現象を、あるスクールカウンセラーは「不思議な鬼ごっこ」と呼んだ）。

彼らの多くは低学力である。しかも、九九は通り抜けているものの小学校中学年の学習内容が定着していないなど、小学校のどこかでつまずいているらしい。しかし、必ずしも発達障害というわけではない。どこかで学習場面からドロップアウトしてきた可能性が高い場合が多い。

たしかに、彼らの行動は非行傾向に近いし、ショッピングセンターでの万引きが報告される場合もあるから、非行と呼ばれるのも無理からぬことである。また、教師への反抗もみられないわけではない。ただ、その反抗は「教室へ入らない」ことに限られていたりする。全体に漂うのは「反抗」というよりは、「居場所のなさ」や「やるせなさ」といった雰囲気である。家庭の様子からは、学校だけでなく家族の中にも居場所がなさそうな様子が垣間見られる。

居場所がないまま漂う中学生たち。彼らの中には、学校に足を向けなくなる生徒もいる。街にいる場合もあれば、家にこもる場合もある。集団で過ごす場合もあれば、一人でいる場合もある。その欠席が30日を超えれば、文部科学省の定義する「不登校」と呼ばれるようになる。しかも、文部科学省の分類によれば「遊び・非行型」と呼ばれるだろうし、学校の中では「怠学傾向」と理解されることも多い。

2. 女子の場合

これも、筆者がスクールカウンセラーとして中学校に勤務する中で気づいた生徒たちだが、今度は女子生徒である。筆者が気づいたのは2000年頃であり、不登校とは別の「護られている実感が薄い思春期女性」という観点から報告したことがある（香川（2001））。

彼女たちは、なんとなく反抗的な様子を漂わせながら、教室の中で過ごしている。4,5名のグループを作って、その「同盟関係」を強固にすることにエネルギーを費やしている。

周りの生徒たちからすると、「ちょっと怖い」という感じがする。これは、大人に対して反抗的であるのと同じ雰囲気が、同世代のクラスメートに対しては「すごんでいる」というように伝わるからであろう。服装なども、同じ制服を着ているのに派手好みに見え、ピアスなどの装身具や化粧などへの親和性が強いことも、周りからすると「怖い」感じがする。

自分たちのグループで一体感を味わっていたい欲求は、最近、女子中学生の間で非常に強まっている。その中でも、彼女たちの一体感への欲求は非常に強い。他の場所では味わえない安全感を、このグループの中でなんとか得ようとするかのように見える。背景にうかがえる「居場所のなさ」は、先に述べた男子生徒の場合とどこか共通性がある。

居場所のない不安が背景にあるだけに、このグループでの人間関係はかなり激しい葛藤を生み出す。いじめやその周辺の「事件」も起きる。そういった迫害的な関係ではじき出される場合もあれば、関係にうんざりして自ら離れたように見える場合もあり、いずれにせよ「グループから外れる」生徒が出てくる。また、本人がもともと抱えている空虚感や居場所のなさが、グループの中では満たされないために、グループ以外でなんとか満たせないものかとさまよい出る場合も少なくない。理由はどうであれ、グループから外れていくことと、教室から外れていくことが重なるようにして、彼女は登校が減少していく。30日を超えれば、文部科学省の定義する「不登校」である。このような生徒の登校が困難になった場合、学校は「非行に親和性のある（ギャル系の！）グループでの人間関係のトラブルが原因」と見がちであるが、背景にある空虚感の大きさに目を向ける必要があろう。また、実は「空虚感がグループでは満たされない」ことからグループから離脱するという面が、「対人関係トラブル」の背景に一役買っていることにも留意すべきである。

男子学生と同じく、学力に困難を抱えている場合も多いため、一度教室から離れると、復帰することはなかなか敷居が高いことになる。そして、女子生徒の場合、ひとたび街にさまよい出てしまうと、性非行なのだか性犯罪被害なのだか分からないような、奇妙な人間関係の渦に巻き込まれていく場合がある。この奇妙な人間関係は、彼女にとって新しい困難を生み出すことになる。性愛化された関係は他者から強力に求められるという感覚を生み出すので、空虚感が満たされたような錯覚を持つことができる。しかし、相手は自分の欲求を満たすために彼女を利用している面があるわけで、彼女は深刻に搾取されている。この構造に気づくことは、本人にとってはとても難しい。

性非行につながっている場合もあれば、つながっていない場合もあるが、どこかうっすらと傷つきを抱えつつ、強烈な居場所のなさの感覚に翻弄されながら、学びの場である学校から漂い出るように不登校になっている女子生徒たちの姿がある。

3. 背景にあるもの

男女それぞれの場合を描出してみた。学校にも家庭にも居場所が得られないような様子で、ふわふわと漂流し浮遊する姿がこのタイプの不登校の特徴である。とりあえず「居場所なき不登校」と呼ぶことにして、このタイプの不登校に共通して見られる諸点を列挙してみよう。

①非行との境目があいまいになってきている

これは、非行の側の変化でもある。かつての「権威への反抗」「大人への反抗」という雰囲気が、子どもたちの非行から失われているらしい。それよりはむしろ、「行き場がなくてうろうろしているうちに、たまたま行動が法律の一線を

越えてしまった」というおもむきの触法行為が増加しているようだ。こうした傾向が強まっていることについて、学校で反社会的な問題行動への指導にあたる生徒指導担当の教員から聞くことが、最近多くなってきている。「振りほどこうとした手がたまたまあたってしまったような、対教師暴力」なども見られる。このような非行や反社会的行動の生徒の言動と「居場所なき不登校」とが、連続したものになっている。

②“傷つき”が背後に感じられる場合が多い

傷はなかなか語られないものである。そのため、彼らの抱えている傷つきは、多くの場合、関わる大人たちが想像力を豊かに持ち続けない限り、像を結ばない。だが、彼らと関わる中で、どうしても背景にある外傷的な体験を無視するわけにはいかない時がある。消化されないままになっている過去の「いじめられ体験」や、家庭や社会でのなんらかの被害体験がうかがわれる場合もある。また、どうも、背後に児童虐待（そこにはネグレクトも含まれる）や、それに近接した不適切な育児環境がうかがわれる場合もあり、次節に述べるような家庭内の困難な状況が慢性化している時もある。さらに言えば、繰り返し触れてきた「居場所のなさ」は、本来あるべきものがないという意味で、陰性外傷の一つということができる。

③学力に困難を抱えていることが多い

彼らの姿を描く中で繰り返し触れてきたが、学力の問題は非常に大きい。発達障害が関連している場合も確かにある。しかし、発達障害や軽度の発達の遅れとは関係なく、学習からドロップアウトする形での低学力が少なくない。学力の遅れた中学生を前にして、どこでつまずいているのかを中学の教員が見出すことは、技術的にかなり難しい。「中１の最初の文字式のところでつまずいた」場合も、「小学校高学年の割合などから分からなくなっている」場合も、「小学校中学年の割り算の定着がおぼつかない」場合も、「授業にさっぱりついていけない」という、同じ姿になって現れるからである。個別の対応の中でようやく「実は割り算の定着が不十分だった」ことが分かるようなことは、どうしても起きる。そのような個別の取り組みを経て、学力の遅れを中学校で取り戻すことは不可能ではないはずである。しかし、現実には、思春期の生徒たちを個別の指導に導入することは非常に難しい。

④家庭の抱える困難が大きい

いくつかの事例では、保護者との面接を行ってきた。その中で感じることは、こうした不登校の背景にある家庭の抱える、心理社会的あるいは社会経済的な困難の大きさである。この点については、項を改めて述べたい。

4. 家庭の抱える困難

前節で述べた子どもたちの“傷つき”は、彼らの家庭の抱える困難と密接に関連している。ある時期、筆者は、この「居場所なき不登校」の多くの事例と取り組む中で、ふと「離婚・借金・うつ・暴力」というフレーズが浮かんでしまったことがある。いささか不謹慎なフレーズのようで戸惑ったのであるが、しかし、子どもたちやその背景にある家族の実情を的確に表しているとも言える。

①離婚などのために両親が両方ともいるわけではない家族

この項目を挙げるのには、若干躊躇も感じる。というのは、離婚が即、子どもの困難につながるわけではなく、離婚を経験しながらも、適切な育児環境を維持している親も少なくないからである。

しかし、臨床上の実感として、やはり、「一人での子育ては困難である」と言わざるを得ない場合は多いし、「その結果、子どもにとって

十分な育児環境ではなくなってしまっている」という場合も少なくない。実際、この「居場所なき不登校」の生徒や、学校に居場所がないまま問題行動が全面に出ている生徒たちの家族に関わっていくと、すでに離婚をしている場合も含め、家庭の夫婦間の不和がテーマとなることは少なくない。

厚生労働省が 2009 年 11 月に発表した資料によれば、2006 年現在で大人が一人の子育て世帯の相対的貧困率は 54.3％であり、50％を超えている。これは、OECD 加盟の 30 か国中、もっとも高い数値となっている。子育て世帯全体の相対的貧困率が 12.2％であることを考えると、やはり、一人での子育て世帯は大きな困難を抱えていると言えるだろう（阿部（2008））。もちろん、大人が一人の世帯の抱える困難は経済的困難だけでなく、「子育てを含むあらゆる家庭の機能において手が足りない」という状況を慢性的に抱えることにもなろう。

このような「余裕のなさ」は、困難な育児状況を生む。また、それだけでなく、「世代間境界の混乱から来る自己イメージの混乱」や、「両親が愛し合った結果自分が生まれたという安定した自己イメージの混乱」など、心理的に自己の存在の基盤が揺らいでしまっている場合も、少なからず見受けられる。

もちろん、こうした困難を乗り越えようと苦労を重ねている親の姿とも多く出会うのではあるが……。

②借金……経済的な困難を抱えた家族

いわゆるバブル経済の崩壊以来、経済的な困難を抱える家庭は増えている。相対的貧困率については前項でも取り上げたが、我が国の相対的貧困率は上昇を続けている。子どもの貧困率は、2006 年現在で 14.2％である。経済的困難は、物質的なことにとどまらず、家庭が様々なことに対応していく余裕を失わせる。このように全般的にものごとに対処する力が落ちることを、湯浅（2008）は、「“溜め”が失われる」と呼んでいる。どうやら、経済的な困難と結びついて、困難な育児状況が生まれ、それを背後に持つ「居場所なき不登校」が増加しているようだ。

このような子どもの抱える心理的問題の背後にある貧困の問題に筆者が気付き始めた当初は、いわゆるリストラや倒産などで、「途中から貧困に落ち込んだインパクト」が問題となる場合が多かったように思う。最近では「そもそも非正規雇用の中にいる若い親」というテーマを抱えている家庭に出会うことも増え始めた。このような「非正規雇用で経済的に余裕のないままで、親になること」は、「未熟な親の増加」問題としてイメージされることも多いように思う。自己責任論と重なった形で「稼ぎもないのに子どもを作るなんて」と、批判的にとらえられる場合もないではない。しかし、若年層雇用のかなりの割合が非正規雇用とならざるを得ないような社会状況がある中で（このこと自体は労働経済学的に検証されるべきだろうが）、「非正規雇用の親」の子育ての困難を「本人の選択にともなう責任」に帰属してよいかどうかは、判断の分かれることであろう。

③うつなどの親が抱えるメンタルヘルス上の問題

スクールカウンセラーとして「居場所なき不登校」と関連した子どもたちや家族に関与する中で、家族の中に様々な精神疾患がある状況と出会うことは少なくない。うつ状態との出会いはもっとも多いが、双極性障害・統合失調症・アルコールをはじめとする依存症・境界性人格障害・自己愛性人格障害などともしばしば出会う。そして、医療につながっていない場合も少なくない。

最も頻繁に出会ううつ状態を中心に述べてみよう。中年期のうつ状態は増加しつつあると言

われており、自殺対策などと関連して、職場のメンタルヘルスの問題として語られることが多い。しかし一方で、うつ状態を抱えた中年期の方々は、家庭に帰れば親としての役割も抱えている。子育て場面でのうつ状態の影響は小さくないと考えられる。

うつ状態と言えば、落ち込んで身動きが取れなくなっている状況をまずは想起しがちである。もちろん、「動けない親」も子どもにとっては大きな問題であろう。しかし同時に、うつ状態には「情緒的に相手の波長に合わせて応答していく能力」を著しく奪うという側面がある。子育ての中で、子どもからの情緒的な働きかけに対して、大人の応答が十分機能しないという状態は、子育ての中で大きな影響があるであろう。子育てということには乳児期の子育ても含まれるのだから、やはり、子育てにうつ状態が与える影響は深刻であるように思う。「うつ状態を抱えた子育て」をはじめとする、精神疾患を抱えながらの子育てについての知見の積み重ねが求められているように思う。

④家庭内における暴力の存在

暴力は、非常に多くの場合、現場にいた人々の心に解離を生み出す。したがって、暴力の場面はなかなか語りの中に現れないし、現れたとしてもそこに漂う切迫感がそぎ落とされている場合がある。従って、聴き取る側は独特のアンテナを向けていることが求められる。そのようなアンテナを向けながら「居場所なき不登校」の家庭のものがたりに耳を向けていると、そこに暴力の存在がうかがわれることがしばしばある。

一昔前、家庭内暴力と言えば子どもが親に暴力を振るうことだった。また、親が子どもに暴力を振るうことは虐待と呼ばれ、近年大きな社会問題になっている。こうした子どもが直接かかわる暴力に加えて、夫婦間の暴力（ドメスティック・バイオレンス）が起きていることも少なくない。夫婦間の暴力を繰り返し目撃することは、最近の児童福祉法の改正で「心理的虐待」として位置づけられるようになっている。いずれにせよ、暴力がすぐ身近に迫った中で育つ子どもたちは確実に増加しており、子どもたちの家庭における安心感は脅かされやすくなっている。

5. さまよえる子どもたち
――方向喪失型の不登校

ここまで、新しいタイプの「居場所なき不登校」について記述してきた。彼らは、家庭にも学校にも安定した居場所がないままさまよっている。

彼らの多くは、子ども自身にとって意味のある形で、大人に関わってもらったという経験が非常に乏しい。「このように過ごしていれば、このように育っていくことができるよ」といったような、生きていくための方向性を大人たちから示してもらえるような経験に、ほとんど出会わないままで過ごしてきているように見える。これを、学校や学習との関係で言えば、「学校に行けばどんなよいことがあるのかわからない」「学ぶことを重ねていくことにどんな意味があるのかわからない」ということになる。「わからない」という言葉だけでは「わからないのは本人が悪い」ということになりそうなので、もう少し言葉を補えば「学校や学ぶことにどんな意味があるのか、そもそも示してもらったことがない」ということなのである。

「どっちを向いて歩いていけばいいのかわからない」中で、うっすらと（あるいは深刻に）自分が傷ついているという感覚だけはリアルに疼いている。その痛みのようなものを抱えて漂っている子どもたち。彼らは、佐藤（2000）の言う「『学び』から逃走する子どもたち」の

一つの姿であると言えるであろう。また、保坂（2000）も、従来の不登校を「神経症型」とした上で、筆者の言う「居場所なき不登校」と類似した子どもたちに関して、新しいタイプの不登校として「脱落型の不登校」を提唱している。

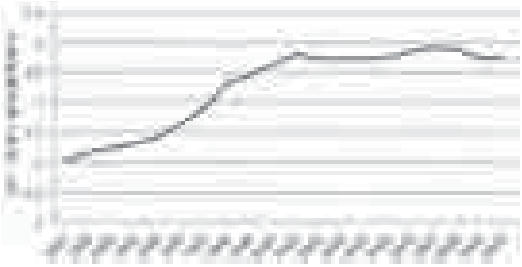
保坂が呼んだように、彼らは学校教育の枠組みから「脱落」するように、学校から遠ざかっているとも言える。一方で、彼らの視点から事態を見たときには、「どうしていいかそもそもの初めから分からない」という感覚が深いことが大きな特徴と言える。この「向かうべき方向がそもそも不在」である点に着目して、筆者は、「方向喪失型」の不登校と呼ぶことにしたい。

この方向喪失型の不登校は、いつ頃から増加してきたのだろうか。横田（1986）は、養護性の問題を持ち、崩壊家庭で経済的レベルが低いという背景を持つ不登校事例を取り上げている。また、森田（1991）も同様の「『現代型』の不登校」に言及している。そして、両者はともに、このタイプの不登校がこれまであまり注目されていなかったことを指摘している。前述の保坂（2000）も含め、これらの研究は先駆的な形で方向喪失型不登校に言及した研究である。

筆者自身が最初にこのタイプの家庭背景を抱えた事例と出会ったのは、1997 年である。そして、学校現場で方向喪失型の不登校がはっきりと目に付くほどに増加してきたことを筆者が実感するようになったのは、2005 年前後である。おそらく、1990 年代を通じてじわじわと増加し続け、2000 年代に入りはっきりと目につくようになったのではなかろうか。この時期は、日本の社会における右上がりの経済成長が終焉し、そのことからくる様々な影響が社会のあちこちに出始めた時期でもある。

この間、不登校の量的な推移はどうなっていたのだろうか。1991 年～ 2010 年の中学校における不登校の発生率を図 2 に示した。図 1 と

図 2：中学生の不登校発生率の変化
（1990 年～ 2010 年）



文部科学省「学校基本調査」に基づく。
文部科学省の定義で 30 日以上欠席したものを不登校としている。

は、統計上の不登校の定義が異なっており、30 日以上欠席の者が不登校とカウントされているが、変化の様子はさほど変わらないであろう。また、図 1 とは縦軸の目盛が大きく異なっていることに注意してほしい。

1991 年にはほぼ 1％だった不登校率は 3 倍弱に増加し、2010 年現在で 2.74％である。これはおよそ 34 人に一人ということだから、「一クラスに一人」の不登校生徒がいることになる。この間の変化は、「1 学年に一人」が「1 クラスに一人」へと不登校の発生率が変化したということになる。

図 1 の期間と図 2 の期間を合わせて不登校発生率の推移を示したのが図 3 である。「さなぎモデル」の不登校が増加した 80 年代の不登校全体の増加も大きかったように思えたが、グラフの傾きからすると、90 年代の増加率の大きさがやはり目を引く。もちろん、その増加の全てを方向喪失型の不登校が占めているわけではないが、しかし、この時期は方向喪失型の不登校が増加した時期とほぼ重なっている。

この時代、戦後日本社会がずっと続けてきた経済的な成長がストップし、右肩下がりの状況が初めて生まれた。1990 年代から 2000 年代にかけて、経済成長なき社会の中で子どもたちは育っている。成長なき社会の中では、成長を支

える様々なシステムや暗黙の価値観が機能不全に陥っている。その中で、学びから逃走し、学校から脱落し、方向を喪失する子どもたちが出現してきているということになるのであろうか。

Ⅳ．方向喪失型の不登校が投げかける問題

ここ 10 年ほどの不登校をめぐる新しい変化として、方向喪失型の不登校とでも呼ぶべき新しいタイプの不登校が増加していることを述べてきた。どのように生きるかを示されないまま傷ついた心を抱えて漂う彼らへの支援を、大人たちが本気で考えることが必要になってきているように思われる。

そして、彼らが抱える「どちらを向いて歩んだらよいのか分からない」感覚は、実は、子どもたちだけでなく社会全体が抱える方向喪失感と呼応し合っているのではなかろうか、という思いがぬぐえない。今、彼らに「なぜ学校に行かなければいけないのか」「勉強してどんなよいことがあるのか」と問われた時に、私たちはどのように答えることができるだろうか。佐藤（2000）も指摘しているが、学歴が社会的移動の手段となる時代は終わっている。いい大学に入っていい会社に入ることが、幸せになるための方程式ではもはやなくなってしまっているのだ。

図３：中学生の不登校発生率の変化
（1977 年～ 2010 年）

文部科学省「学校基本調査」に基づく。
1990 年までは文部科学省の定義で 50 日以上欠席したものを不登校とし、1991 年以降は 30 日以上の欠席したものを不登校としている。

山田（2004）は、最終学歴によって就職先が振り分けられていくシステムをパイプライン・システムとして紹介した。このパイプライン・システムに乗っていれば、どこか自分のいるべき場所としての“就職先”にたどり着くことができるとしている。ところが、今や、このパイプライン・システムからが機能不全を起こしてしまっており、そこからの“漏れ”が生じていると論じている。今のシステムに乗っているのでは、どこにも辿りつかないのではなかろうか、という感覚は、不登校の中学生から就活に悩む大学生まで、若者たちを広く覆っている。そして、実は大人たちもその方向喪失感を共有している。

そうなると、方向喪失型の不登校を解決していくためには、社会システム自体の機能不全を解決することが必要だということになる。これは、学校現場で一人一人の子どもたちが抱える困難と取り組むことで精一杯の筆者にとっては、いささか手に余ることである。当面、筆者が考えていることは、まずは「方向喪失型の不登校」という観点を明確に持ち続けることである。

前述したように、彼らは、行動としての非行との親和性が高い。「怠学傾向」と理解されていることがほとんどだし、彼らが不登校になった場合、文部科学省の統計では「遊び･非行型」と分類されることになるだろう。この「怠け」や「遊び・非行型」というラベルと、2000 年代の日本社会に流行の「自己責任論」がセットになると、「怠けて遊んでいるのだから本人の責任」と、あっさり片づけられてしまう。しかし、彼らの方向喪失感の深さは、「怠け」や「遊び・非行」という言葉では十分表現されていない。確かに、彼らは勤勉ではないし、非行もないわけではない。しかし、その背後に抱えている心のありようや、そこに潜む空虚感に対する

想像力を失わずに関わり続けることが必要であろう。そして、その関わりのネットワークを広げていくことが重要である。スクールカウンセラーの実践ならば、これは、教員の理解を広げていくことにあたる。また、教育相談担当の教員であれば、彼らの周辺に教育的営みを広げていく教師集団の輪を広げていくことにあたる。

また、彼らが他者と意味のあるつながりの中で自己表現をする回路を見出した時、驚くべき勢いで肯定的な変化が生じることがあることには留意しておく必要があるだろう。このように、外界との関係での有意義な体験が変化への大きな契機となり得るということ自体、彼らの不適応は彼らの内界だけにあるのではなく、外界との関係のもつれであることを示唆しているように思える。その変化は、いわゆる面接室の中でのカウンセリングで生じる場合もあるが、面接室の外の人間関係の中で起きる場合もある。スクールカウンセラーは、学校という日常生活場面の中で多様な関係性に巻き込まれながら関わっていくことになる。自分と子どもたちとの関係だけでなく、子どもたちが他の大人たちと取り結ぶ関係が意味を持ったものになるように配慮していくことも非常に重要であろう。

さらに言えば、「意味のある関係の中で自己表現をしていく回路を育てる」ということは、実は、学校教育の本来の目的とかなり近いのではなかろうか。表現のツールとしての「言語」が豊かな生徒の場合、自らの置かれた状況に関するメタレベルでの認知や自己理解を深めていくことができる場合がある。子どもたちが持つ「言葉」を育てることは、学校教育の持つ重要な役割の一つである。彼らが方向喪失感を乗り越えていくために、学校教育、特に初等教育が、言葉を育てることを大切にした教育を行うことの意義は大きい。

おそらく、方向喪失型不登校への関わりにおいては、心理臨床と学校教育とがコ・ワークしていくことがこれまでにないほどに重要である。内的なことに関するアンテナがないと、彼らを的確に理解することが難しい。一方で、彼らの抱える問題は、内的なものをはるかに超えた部分があるので、面接室内での内的体験だけでは肯定的な変化が難しい。内なる世界と外なる世界の両方にまなざしを向けながらの、心理社会的な支援が強く求められている。

Ⅴ．終わりに――今後の課題

村上龍は、2000 年に「希望の国のエクソダス」という小説を書いた（村上（2000a））。この小説は、2001 年秋に多数の中学生が学校から離脱するということを発端に、当時からすると近未来である 21 世紀初めの 10 年の社会が描かれている。小説の中の中学生たちは、「学校は、自分たちが今の社会を生きていくためのリスク管理の仕方を教えてくれない」など、学校教育が生きる上での方向性を与えてくれないことを痛烈に指摘しながら、学校を離脱していく。彼らは「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」と宣言して、この社会からも離脱していく。そして、新しい価値観・新しい技能を駆使して、ユートピア的なおもむきのある新しい共同体を形成していく。

彼らの学校からの、そして、社会からの“離脱”は、現状の閉塞感からの“飛翔”を伴うものであった。これは村上龍が取材した中学生たちが、有名私立中学校の生徒たちだったこともあるだろうが（村上（2000b））、しかし、“飛翔”の可能性に賭けてみたい気持ちは、この小説の読者として私も共有できるものがある。

この小説の中で描かれた「希望がない」社会の閉塞感や、大人たちが方向性を示してくれな

いという状況は、その後の社会の歩みの中で実現してしまっているように思う。その意味で、この小説は的確な“予言”だったのかもしれない。しかし、現実の中では、学校からの離脱は、保坂（2000）が「脱落型不登校」と名付けたように、飛翔ではなく転落を伴ってしまっている。

思い起こせば、1980年代には、戦後の経済成長の中で育ってきたシステムが良くも悪くも成熟し、そのシステムの持つ軋みや、システムというものがそれ自体いつも持っていしまう個性への圧迫があった。人が傷つき心を病むというのは、それこそ「受験戦争と教育ママ」という形で子どもたちを圧迫する要素が表現されていたように、「システムによる傷つきや病」だった。ところが、それから30年が経過した現在では、「システムが機能しないこと」や「システムに乗せてもらえないこと」からくる方向喪失感が、個人の心理的な不適応の社会的な背景として大きな役割を担うようになってきている。方向喪失型の不登校は、その子どもたちにおける表れということができる。

システムが崩れつつある社会の中で、人が育つことや生きていくことへの支援は、従来の、個人と社会を対峙するものと把握するパラダイムではない、新しいパラダイムに基づいた活動が求められているのかもしれない。

本稿は、不登校の新しい姿を全体像として描き出すために、事例や調査に基づく根拠を十分に示さないままとなっている。また、どのような対応が求められるかについても、十分な論を展開していない。これらの諸点は、今後の課題であろう。

本稿のもとになる様々な出会いの中で、筆者に様々なことを教えてくれた中学生たちや保護者の方々、スクールカウンセラーの仲間たち、学校の先生方に感謝します。また、本稿の考察は、いくつもの教育委員会から教員研修の講師としてお招きいただき、そこで会場の先生方と語り合う中で生まれたものです。併せて感謝いたします。

引用文献：

阿部彩　（2008）　子どもの貧困：日本の不公平を考える. 岩波書店.

保坂亨　（2000）　学校を欠席する子どもたち：長期欠席・不登校から学校教育を考える. 東京大学出版会.

香川克　（2001）　護られているという実感の薄い子どもたちに対する心理的サポート. 教育と医学. 2001年4月号.

小泉英二　（1973）　登校拒否. 学事出版.

森田洋司　（1991）「不登校」現象の社会学. 学文社.

村上龍　（2000a）　希望の国のエクソダス. 文藝春秋.

村上龍　（2000b）「希望の国のエクソダス」取材ノート. 文藝春秋.

佐藤学　（2000）「学び」から逃走する子どもたち. 岩波書店.

山田昌弘　（2004）　希望格差社会. 筑摩書房.

山中康裕　（1978）　思春期内閉 Juvenile Seclusion：治療実践よりみた内閉神経症（いわゆる学校恐怖症）の精神病理.　中井久夫・山中康裕（編）思春期の精神病理と治療. 岩崎学術出版社.

横田正雄　（1986）　底辺の不登校児たち：崩壊家庭の不登校児の事例研究. 精神衛生研究33, 245-53.

湯浅誠　（2008）　反貧困：「すべり台社会」からの脱出. 岩波書店.